

綿谷修写真集 CHILDHOOD

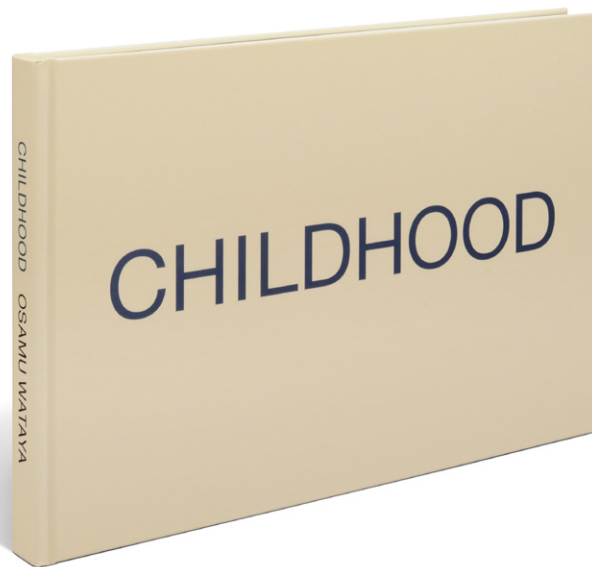
アムステルダム運河とロバ、
オホーツクの海辺の小屋、流水、
ウクライナの少年と猫、女の尻をのぞき込む男、
異郷と故郷、過去と現在が、微細に響き合っただけ一度だけ集う。

A4判 | 上製 | 216頁
テキスト「写真のふるさと」への通路 | 土屋誠一
定価4500円（本体＋税）
限定1200部
2010年3月10日刊行

ご注文・お問い合わせはギャラリーWEBサイトより、
またはブエノ! ブックスまでお願いいたします。

ブエノ! ブックス
info@buenobooks.com
www.buenobooks.com

RAT HOLE GALLERY
gallery@ratholegallery.com
www.ratholegallery.com
〒107-0062 東京都港区南青山5-5-3 B1
TEL. 03-6419-3581 FAX. 03-6419-3583





Amsterdam



Hokkaido Hometown



Boy at 12



Capability

直覚のポリフォニー

本書を構成している場所も時間も対象もならん関連の無い4つのセクションは、しかし見た者に、それぞれの写真が分ちがたく微細に共鳴しあっていることを気づかせる。いつからか綿谷修は、写真の単独性や純粋性を追求することを断念し、未熟さや軽さ、そしてユーモアや郷愁さえも写真にとって重要なファクターであることを率直に認めていた。一枚の写真はつねに他の写真と共鳴し合いながら、世界をさまざまな音色で満たしている。いやむしろ、その音色こそが、世界であり同時に私なのではないかと。

この『CHILDHOOD』において、写真のモダニズムが常としてきた「私－写真－世界」という直線的な思考回路はすでに見あたらない。しかしこの回路の抗しがたい呪縛に対しては、自身6冊目となるこの写真集に至る過程において、おそらく綿谷自身が最も苛立っていたのではないだろうか。綿谷は写真を撮り続けながらも、一人の編集者として優れた写真家——いずれも、日本の戦後の写真のモダニズムと真剣に対峙し、それを乗り越えようと格闘してきた作家の写真集を数多く出版してきた。彼らと彼らの仕事を通して、綿谷はモダニズムとその抗しがたい根深さ、そのハードコアを全身でたっぷり味わったはずである。おそ

らくそれは、限界まで達していた。

この写真集には、最初期に撮られた「Amsterdam」から近作「Capability」に至るまでの写真が掲載されているが、そのほとんどが未発表作である。これは作者によれば、既発表、未発表を問わず、すべての写真を並列に見直した結果に過ぎないという。ここには、写真家としてのキャリアを自伝的に語ろうとする意図も、同時代論的な問題意識もない。ここで作者に何が起きたのか、私たちに知るすべはない。確からしいことは、この『CHILDHOOD』が単なる過去の写真の見直しの結果ではなく、その先にある未知の過去との遭遇を希求して止まないことである。

死と同じように、幼年期は私たちの経験の外部にある。しかし写真を見ていると、幼年期の記憶を持たない意識が溢れ出してくるように感じるときがある。このヴァルネラブルな神経の写真家によって、アムステルダム運河とロバ、オホーツクの海辺の小屋、流氷、ウクライナの少年と猫、女の尻をのぞき込む男、異郷と故郷、過去と現在が、微細に響き合ってたただ一度だけ集う。